

呼び出し「現代の赤紙」

検察が死刑を求刑するともみられた裁判員裁判が鳥取地裁であった。市民から選ばれた裁判員の判断が注目される中、「裁判員制度はいらぬ」と地裁前で呼びかけた「とめよう戦争への道! 百万人署名運動山陰連絡会」の会員のうち、田中重文さん(64)≡境港市≡と池本俊子さん(70)≡鳥取市≡の言葉に耳を傾けた。

百万人署名運動山陰連絡会

田中重文さん (64) ≡境港市

池本俊子さん (70) ≡鳥取市

裁判員制度に反対

「なぜ反対なのか。田中さん 「市民の常識」を裁判に採り入れる制度と言われているが、例えば神垣清水氏(最高検総務部長や横浜地検

——なぜ反対なのか。 事正を歴任)は「治安への効果もある」と取材に答えている。

つまり、戦争につながる制度だから反対している。

——ん? 戦争と裁判員裁判



裁判員裁判について抗議する「とめよう戦争への道! 百万人署名運動山陰連絡会」の会員ら≡2月22日、鳥取地裁

(下地裁)



がどう関係するのか。論理の飛躍では。

田中さん 米国では戦場に行かされるのは貧しい労働者です。一方、日本では企業が人件費を削り、若年層の多くが不安定な雇用状態にある。しわ寄せを背負わされた彼らを戦場に送りだそうとしたら反乱が起きるかも知れない。素直に戦場に行つてもらうため、「治安意識」を持つてもらう必要がある。

裁判員制度で市民は「裁く側」と「裁かれる側」に分かれてしまう。団結して「お上」に立ち向かうことよりもお互いを監視し合うようになる。治安優先の考えを上げよう、「お上に盾突くやつは処罰する」との治安意識を植え付けよう、という狙いが裁判員裁判にある。

——犯罪を憎む意味で「治安意識」は必要では。

池本さん すべてを社会の責任にするのは問題だが、すべてを個人の責任に押しつけるのもまた問題。なぜ犯罪に走ったのかという時代の状況、社会の背景を考えることが大事だ。

また、裁判員候補として裁判

所から呼び出しがあると、よほどの理由がない限り辞退できない、10万円以下の過料が科されるという点で「現代の赤紙」といえる。

——裁判員になることが死刑制度を深く考えるきっかけになるのでは。市民感覚からかけ離れた裁判を改革することは必要なのは。

池本さん 職業裁判官でも死刑の選択に苦悩するという。裁判官は覚悟して職業を選んだ人だが、抽選で選ばれた裁判員に死刑を言い渡した苦痛を一生背負わせるのは問題だ。

田中さん 本当に死刑をまじめに考えるきっかけになるだろうか。最も苦痛な部分、つまり死刑執行のボタンを押す苦痛まで担うわけではない。それより先にすべき改革がある。警察の留置場を拘留所代わりとする代用監獄や、密室での取り調べ。こういった冤罪の温床こそ早急に改革するべきだ。

池本さん 裁判所、検察、弁護士が密室で行う公判前整理手続きにも問題がある。その場であつたストーリーを市民が知ることではない。これでは被告はまだ罪を犯した疑いがある段階なのに、防衛権がないがしろにされることになる。プロの裁判官でも冤罪は起きる。法律の知識がない市民が数日の審議で判決を下すことが妥当だろうか。

「治安意識」植え付けでは